

書評：1

Rory McTurk (ed.)
A Companion to Old Norse-Icelandic Literature and Culture
 (Blackwell Companions to Literature and Culture).
 Oxford: Blackwell 2005, xiii+567 p.

小澤 実

ブラックウェル社の著名な叢書である「ブラックウェル文学と文化コンパニオン」の一翼を担う本書は、中世アイスランドという文化空間に特化した、評者が知るかぎり世界で初めてのハンドブックである。

確かに、これまでも中世アイスランドに関わる項目事典やハンドブックが存在しなかった、というわけではない。中世学の総合事典である『中世事典』(1978-98)や『スクリプナー版中世事典』(1982-89)¹、ゲルマン学に不可欠の決定版『ホープス・ゲルマン古代学事典』(1973-2007)²、中世スカンディナヴィア世界全体を視野に収める『北欧中世事典』(1956-78)や『中世北欧・百科事典』(1993)³、アイスランド史に関わるハンディな項目事典『アイスランド歴史事典』(1997)でも⁴、中世アイスランドに関連する事項は、他地域に比べても積極的に取り上げられていた。また、ジーマクとパールソンの『古ノルド文学事典』(1987)、ジーマクの『ゲルマン神話事典』(1995)、リンドウの『北欧神話事典』(2001)は、文学や神話に関する項目に加えて、北欧精神世界に関わる歴史項目を数多く採用していた⁵。

しかしながらこれらの先行諸事典は、その項目選定にあたって古ノルド語という語圏やスカンディナヴィアという比較的大きな文化空間を想定しており、かならずしも中世アイスランドに限局していたわけではない。それに対し本書は、中世アイスランド文学という立脚点から、この火山と氷河が並存する大西洋に浮かぶ孤島が生み出した文化の総体を照射しようとしている点で、従来の事典類とは一線を画する。そこには、中世アイスラ

ンド文化が何によって構成されているのかという意識を読者に喚起させ、このヨーロッパで最も刺激的な文化空間の持つ魅力を追体験させようとの目論見を読み取ることができる。そしてそれは、かなりの程度成功しているように見える。

編者ローリ・マクタークは現在リーズ大学英語学部の教授職にあり、文学理論やアイスランド文学を教えている。オックスフォード大学とアイスランド大学で学位を取得し、スウェーデンの Lund 大学、デンマークのコペンハーゲン大学で教鞭をとった後、ダブリンへ移り、1978年にリーズ大学に職を得たスカンディナヴィストである。1991年には、ダブリンのユニヴァーシティ・カレッジに提出した博士論文を下敷きとした「ラグナル・ロズブロークのサガ」に関する詳細な研究を、2005年には、チャーサーと北欧を含む非イングランド世界との関係を論じた研究を上梓した⁶。いずれも当該分野における基本書であり、マクタークが英語圏における北欧学の第一人者であることに間違いはない。このような彼の経歴は、彼が、本書のような非北欧圏の読者を対象としたハンドブックを編むのに最も適した人物の一人であることを証明する。

内容の紹介に移ろう。編者による、本書の成り立ちを述べる短い導入ののち、専門家の手になる29の章が続く。本シリーズは「文学と文化」とあるように、「文学(文献) literature」、つまりテキストを中心に据えながらも、その文学を生み出した背景となる「文化 culture」、つまりコンテクストも同時に視野に収めるという特徴をもつ⁷。ア

イスランド中世文学を対象とする本書も、シリーズの意図に逸れるところはない。各章は、第1章「経済と社会の考古学 *Archeology of Economy and Society*」から第29章「古ノルド語韻文とサガのなかの女性 *Women in Old Norse poetry and Sagas*」まで、アルファベット・タイトル順に並んでいるが、これをあえて「文学」と「文化」に腑分けするとするならば、次のようになるだろう。

文学は韻文と散文に分かれる。まずは韻文に関する章があり、第3章のカトリーナ・アットウッド「キリスト教詩 *Christian poetry*」、第5章のテリー・ガンネル「エッダ詩 *Eddic poetry*」、第12章のショーン・ヒューズ「後期世俗詩 *Late secular poetry*」、第27章のディアナ・ウェイリー「スカルド詩 *Skaldic poetry*」であり、その作詩技術に関して、第15章のラッセル・プール「韻律と韻律学 *Metre and metrics*」が補足する。他方散文を扱う章には、第2章のマーガレット・コーマック「キリスト教伝記 *Christian biography*」、第6章のヴェースティン・オーラソン「家族サガ *Family sagas*」（評者註：通例、「アイスランド人のサガ」と呼ばれている）、第9章のステファニー・ヴェルト「歴史記述と偽史 *Historiography and pseud-history*」、第11章のマシュー・ドリスコル「後期散文フィクション *Late prose fiction (lygisögur)*」、第19章のスヴァンヒルドゥル・オースカルスドッティル「キリスト教教育に関する散文 *Prose of Christian instruction*」、第21章のユルグ・グラウザー「ロマンス *Romance (Translated riddarasögur)*」、第22章のアールマン・ヤコブソン「王の伝記 *Royal biography*」、第24章のウルヴァル・ブラガソン「同時代史のサガ。テキストと研究 *Sagas of contemporary history (Sturlunga saga) : texts and research*」、第25章のトーフイ・H・トゥリニウス「アイスランド古史のサガ *Sagas of Icelandic prehistory (fornaldarsögur)*」、第26章のエリザベス・アシュマン・ローウェとジョセフ・ハリス「小編散文 *Short prose narrative (þáttur)*」があり、第20章のソーリル・オースカルソン「修辞と文体 *Rhetoric and style*」が文体論を扱う。また、韻文と散文双方に関わるが、アイスランド文学の受容史として、第4章のヨーン・カール・ヘルガソン「連続性？ポスト中世におけるアイスランド・サガ

Continuity ? The Icelandic sagas in post-medieval times」と第18章のアンドリュウ・ウォーン「古ノルド語と古アイスランド語文学のポスト中世における受容 *The post-medieval reception of Old Norse and Old Icelandic literature*」を見ることがができる。

他方、文化に関する章は、テキストの直接の背景となる、第10章のマイケル・バーンズ「言語 *Language*」、第14章のグズヴァルズル・モール・グンラウグソン「写本と古書体学 *Manuscripts and palaeography*」、第23章のパトリック・ラーション「ルーン *Runes*」と、テキスト生成の背景となるアイスランド社会の諸相を描き出す、第1章のオリ・ヴェーステインソン「経済と社会の考古学 *Archaeology of economy and society*」、第7章のジュディス・ジェッシュ「地理と旅行 *Geography and travel*」、第8章のヘルギ・ソーラークソン「歴史的背景。アイスランド 870-1400 *Historical background: Iceland 870-1400*」、第13章のグズムンド・サンヴィックとヨーン・ヴィザル・シグルズソン「法 *Laws*」、第17章のピーター・オルトン「異教神話と宗教 *Pagan myth and religion*」、第28章のグンナー・カールソン「社会制度 *Social institutions*」、そしてテキストをつうじて見たアイスランド社会をテーマとする、第16章のギースリ・シグルズソン「アイスランド人のサガに見る口承性とリテラシー *Orality and literacy in the sagas of Icelanders*」と第29章のジュディ・クイン「古ノルド語詩とサガに見る女性 *Women in Old Norse poetry and sagas*」がある。

1章あたりの平均ページ数は20ページであり、いずれも最新の文献目録をひきながら当該テーマの研究現況を概観する。執筆者は担当した項目分野においてモノグラフを残している第一人者であり、現時点での最良の選択の1つである。この『コンパニオン』と類似の試みは、『古ノルド語・アイスランド語文学 批判的ガイド』(1985)でもなされているが、こちらはジョン・リンドウ「神話学と神話記述 *Mythology and mythography*」、ジョセフ・ハリス「エッダ詩 *Eddic poetry*」、ロベルタ・フランク「スカルド詩 *Skaldic poetry*」、テオドル・M・アンダーソン「王のサガ *King's sagas (Konungasögur)*」、キャロル・J・クローヴァー「アイスランド家族の

サガ (アイスランド人のサガ) Icelandic family saga (*Isländingasögur*)、マリアンス・カリンケ「北歐ロマンス (騎士のサガ) Norse Romance (*Riddarasögur*)」という、6つの文学類型にのみとどめられている (ただしこの『批判的ガイド』は、1つの項目あたりの頁数が40ページから90ページと、『コンパニオン』に比べれば格段に長く、内容も厚い)⁸。また、サガ文学を概観したクルト・シーア『サガ文学』(1970)という便利な手引きもあるが、短い上に内容がやや古く、韻文を扱っているわけではない⁹。いずれも、いまなお中世アイスランド文学の研究には不可欠であるが、中世アイスランド文学の諸類型をほぼ網羅している『コンパニオン』の代わりとなるわけではない。

以上に紹介した本書の構成は、2点において近年のアイスランド中世研究の流れを反映している。1つは、英米圏の研究者による寄稿が全体の3分の1以上を占めていることである。これは編者が英国人マクタークだからと考える向きもあるが、評者には必ずしもそうとは思えない。というのも近年、アイスランド研究者が、オーストラリアを含む英語圏で爆発的に増加しているという現実があるからである¹⁰。30年前であれば、アイスランド研究は、コペンハーゲン大学の付置施設アルニ・マグヌソン研究所に集う北欧人研究者か、もしくは、アイスランド大学に所属するアイスランド人研究者でなければ、満足のいく研究成果を得ることはできなかつただろう。というのも、16世紀以来、中世アイスランドに関するマテリアルが主としてコペンハーゲンに持ち帰られたため、現物は王立図書館や大学施設に行かなければ参観できなかつたからである。しかしながら今や、さまざまな研究機関の不断の努力により写本のファクシミリ版の公刊が進み、他方でアイスランドを含む北欧への交通の便も格段によくなった。そして北欧で研鑽を積んだ英語圏の第1世代の研究者が、祖国の研究機関でしかるべきポストを占め、現地と比べても遜色のない成果を生み出し、彼らの教え子たちが英米圏の大学で学位を取得する段階に入っている。アメリカで言えばカリフォルニア大学バークレー校やスタンフォード大学、イギリスで言えばロンドン大学やケンブリッジ大学

が、オーストラリアで言えばシドニー大学が世界の北歐研究の1つの拠点として、すでに無視し得ない役割を果たしている¹¹。もちろん彼ら(彼女ら)は、英語という最も普遍性の高い言語で研究を發表することができるという生得の利点をもっていることも忘れてはならない。質の高い研究はドイツ語圏でも生み出されているが、英語圏が圧倒的に目立つのは、英語とドイツ語の普遍力の差によるところが大きい。

2つ目は、やはり30年前であれば関心をもたれることすら稀であったテーマが、1つの項目を与えられるようになったことである。「文学」で考えてみよう。かつて中世アイスランドの散文で注目されるものと言えば「サガ史料群」であり、その中でも文体等の面で「文学作品」として論議を呼ぶものに限られていた。とりわけ、「王のサガ」、「アイスランド人のサガ」、「古代のサガ」の3類型である¹²。この『コンパニオン』では、それぞれ第22章「王の伝記」、第6章「家族のサガ」、第25章「アイスランド古史のサガ」にあたる。このような類型区分は書かれた内容に基づくものであり、他の地域の中世文学の内容と比較しうる構造を備えた作品であった。しかしながら、本書で項目として取り上げられた散文は、それだけにとどまらない。第2章「キリスト教の伝記」(いわゆる「司教サガ」を含めたキリスト教関係散文)、第9章「歴史記述と偽史」、第11章「後期散文フィクション」、第19章「キリスト教教育に関する散文」、そして長大なサガの要所に盛り込まれている「小話」を扱った第26章「小編散文」が、わざわざ他の類型の「サガ史料群」と同一水準で扱われている。これはただ、従来等閑視されていた類型を追加したというだけではなく、「サガ史料群」に対する近年のより大きな態度の変化を反映しているように思われる。つまり、文体や内容の類型化という旧来の様式論的アプローチから、各類型がどのようなプロセスを経て成立し、またどのような場で機能したのかという生成論的または機能論的アプローチに移行しつつあるその流れが、表面に湧出してきているのではないだろうか¹³。前述した新たに追加された項目は、語りのスタイルや想像力といった近代的な「文学」的価値と同一線上に置いた場合、必ずしも「高尚」とはいえない。しかし

ながら、それぞれを中世アイスランドという文化空間にあらためて置きなおした場合、近代的価値では測ることのできない各類型の意義というものたちがあらわれてくる。とりわけ第2章「キリスト教の伝記」や第9章「歴史記述と偽史」などは、それが生成し利用されたコンテクストを再現して初めてその史料的価値を正確に捉えることができるはずであるし、第11章「後期散文フィクション」、第22章「ロマンス」、第25章「アイスランド古史のサガ」といった外国の文学作品にモチーフを得たもの、またはその翻案もしくは翻訳が、中世後期に集中的にあらわれる理由も、ただ文学的要素のみに目を向けては明らかとはならない。そういった観点からいま述べた項目を読み返すならば、なぜ編者マクタークが、第1章「経済と社会の考古学」や第7章「地理と旅行」といったコンテクストにかかわる項目を設定したのかが理解できるのではないだろうか。

とはいえ、いくつか気になる点がないわけではない。最初にも述べたが、本書は中世アイスランド文学と呼ばれる総体を、一方でテキストという「文学」の側面から、もう一方でコンテクストという「文化」の側面から、明らかにしようとの試みであることは繰り返し確認した。しかしながらテキストとコンテクストがそれぞれ別個のものとして扱われては、その意義が半減する。本書の重心がテキストに置かれている以上、本書の中で扱われるコンテクストは、ただ無意味な外枠としてのみ語られるのではなく、テキストがどのように生成されてきたのかを明らかにするという役割を担うべきである。アイスランドのもつ先天的または後天的構成要素が、エッダ、スカルド詩、サガ史料群という「アイスランド文学」の生成過程とその内容に、どれだけの影響を与え、ヨーロッパ中世世界に1つの文化的極域を生ぜしめたのか、その点に触れるべきであったというのが、評者の思うところである。

2点を挙げて、より具体的に指摘しよう。1つは「自然環境」であり、荒海、灌木、火山、氷河といった、アイスランドに特徴的な自然景観や海獣や家畜といったアイスランド人の生活と深く関わる動物が、「アイスランド文学」の、たとえばサガの背景描写やスカルド詩のケニングに見られる表

象形式や文学的定型表現（トポス）にどのような影響を与えているのかという問題である¹⁴。仮にアイスランドを他の地域から際立たせている要素があるとするならば、第1に挙げられるべきはこの自然環境である。年に1度の全島集会（アルシング）が開かれていたシングヴェトリルの奇観や島のそこかしこに見える氷河や瀑布は、これもやはり他の地域からアイスランドを際立たせる「サガ史料群」の構成のあり方と何らかのつながりを持っていた可能性は大いにある。確かに、すでにアイスランドにおける自然環境と人間というテーマに関して、文化人類学者キアステン・ハストロップが大きな研究を残しているが、彼女の作品は必ずしもテキストの精密な分析に基づくとはいえない調査研究であり、文献学者の作業とは本質的に異なる¹⁵。景観が人間の認識能力に、またその逆がどのような影響を与えるのかという、サイモン・シャーマがその『風景と記憶』のなかで採用した認知地理学的なアプローチを意識するならば、自然景観の持つ重要性もおのずと明らかになるはずである¹⁶。

もう1つは、「文学」と「文化」をつなぐ接点、つまり「写本生産」に関する問題である。確かに第14章は「写本と古書体学」と銘打たれ、そこで写本生産に関して触れられていないわけではないが、評者が問題にしたいのはそこで語られているレベルの「写本生産」ではない¹⁷。たとえば、エッダは「王室写本 Codex Regius」その他に、スカルド詩とサガ史料群は、さまざまな写本として現在に伝承している。こうした「アイスランド文学」が口承文学としていつ成立したのかという問いは、それとして重要な問題であるが、他方でそれらを文字テキスト化した写本がいつ成立したのかという問題は、別に考察する必要がある。手間のかかる写本生産は個人でできるものではなく、写字室でチームを組んでおこなう以上、写本生産の「場」を想定しなければならない。その「場」とは、写字と挿絵描写が可能である人物を抱えた修道院もしくは司教座であり、アイスランドであれば、スカーホルトとホーラルという2つの司教座、男女合わせて5つのベネディクト会系修道院、そして6つのアウグスティヌス会系修道院である¹⁸。しかしながらこのような、一種文芸的な趣向

をもち、膨大な時間と資本を必要とする写本群が、聖堂参事会員や修道士の自発的意思によってのみ成立するはずもなく、そこには生産を依頼したパトロンや読み聞かせられる読者の存在が想定されるべきである¹⁹。そのパトロンとは、潤沢な経済リソースを手中にしていた在地有力者であり、場合によってはノルウェー王権であったかもしれない²⁰。つまり、評者が期待しているのは、写字生、写本工房、写本のパトロン、さらにその読者を含めた「写本生産」という項目である。もちろん、個別の写本に関しては、19世紀以来膨大な研究もあり、「アイスランド古文学 [Íslensk fornrit] シリ

ーズのような校訂本の序文を見れば、その写本の作成過程に関してある程度の情報を得ることはできる。しかしながら、その写本が製作される「場」を明らかにすることは歴史学に課された役割であり、その分析は『コンパニオン』の2つの軸である「文学」と「社会」をつなぐだけではなく、中世アイスランド社会のダイナミズムを解明する焦点にもなるはずである。現在、紛争解決という観点から注目されるアイスランドであるが、写本生産という観点からも、見直す必要があるのではないだろうか²¹。

注

¹ R.-H. Bauter (hrsg.), *Lexikon des Mittelalters*. 9 Bd. München / Köln 1978-98 ; J. Strayer (ed.), *Dictionary of the Middle Ages*. 13 vols. New York 1982-89.

² H. Beck et al. (hrsg.), *Reallexikon der germanischen Altertumskunde*. 2 Aufl. 34 Bd. Berlin 1973-2007.

³ J. Brøndsted et al. (red.), *Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder*. 22 bd. København- Oslo-Malmø 1956-78; Ph. Pulsiano (ed.), *Medieval Scandinavia. An Encyclopedia*. New York 1993.

⁴ G. Háfdanarson, *Historical Dictionary of Iceland* (European Historical Dictionaries 24). London 1997.

⁵ R. Simek & H. Pálsson, *Lexikon der altnordischen Literatur* (Kröners Taschenausgabe 490). Stuttgart 1987 ; R. Simek, *Lexikon der germanischen Mythologie* (Kröners Taschenausgabe 368). 2 Aufl. Stuttgart 1995 ; John Lindow, *Norse mythology. A guide to the gods, heroes, rituals, and beliefs*. Oxford 2001.

⁶ R. McTurk, *Studies in Ragnars saga loðbrókar and its majour Scandinavian analogues* (Medium Æum Monographs N.S. 15). Oxford 1991 ; Id., *Chaucer and the Norse and Celtic Worlds*. Aldershot 2005.

⁷ 中世に関しては、本書以外に、P. Brown (ed.), *A Companion to Chaucer* (2001) と Ph. Pulsiano (ed.), *A Companion to Anglo-Saxon Literature and Culture* (2001) がある。

⁸ Carol J. Clover & J. Lindow (eds.), *Old Norse-Icelandic literature: a critical guide*. Toronto 1985. なお2005年に、テオドール・M・アンダーソンの序文を付した第2刷が、アメリカ中世アカデミーの出版部より再版された。アンダー

ソンは其中で、初版が刊行されて以降の研究をサーヴェイしており、近年のサガ研究の流れを理解するためには必読である。

⁹ K. Schier, *Sagaliteratur*. Stuttgart 1970.

¹⁰ 大変興味深いことに、英米圏では、アイスランド研究者がこれだけ増えているにもかかわらず、他の北欧地域(デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド)の中世を専門とする研究者は、相変わらず皆無に等しい。古アイスランド語は古英語と親近性があるため、古英語を習得すれば古ノルド語に比較的簡単に移行できるという点が、理由の一つであると思われる。

¹¹ たとえば、いずれもアイスランド出身者であるにもかかわらず、第1章の執筆者であるオッリ・ヴェーステインソンはロンドン大学で、第24章の執筆者であるウルヴァル・ブラガソンはカリフォルニア大学バークレー校で博士号を取得している。

¹² 菅原邦城が中心となって執筆された解説では、「王のサガ」、「アイスランド人のサガ」、「古代のサガ」、「司教のサガ」の4類型が挙げられている。日本アイスランド学会編『サガ選集』(東海大学出版会 1991), 271-89頁。

¹³ これは様式論的アプローチが不要になったということの意味しない。さもないければ、第20章「修辞と文体」が設けられるはずもない。なお、最新のアイスランド文学史において中世散文を担当したスヴェッリル・トーマソンは、中世アイスランド文学は「伝統的な口承伝統と教養的修辞に基づく思考方法という2つの文化の、絶えざるぶつかりあい」、つまりラテン文学をつうじて流入してきた外部要素と「アイスランド共同体」成立以降連綿と続く土着的要素を特徴とす

- る、と結論している。D. Neijmann (ed.), *A History of Icelandic Literature* (Histories of Scandinavian Literature 5). Lincoln & London 2006, p. 173.
- ¹⁴ 第1章「経済と社会の考古学」で、オッリ・ヴェーステインソンが人間と家畜との関係については少し触れてはいるが、それが「文学」にどのように反映されているのかまでを視野に入れているわけではない。
- ¹⁵ K. Hastrup, *Culture and history of medieval Iceland: an anthropological analysis of structure and change*. Oxford 1985 ; Id., *Nature and policy in Iceland, 1400-1800: an anthropological analysis of history and mentality*. Oxford 1990 ; Id., *A place apart: an anthropological study of the Icelandic world*. Oxford 1995.
- ¹⁶ サイモン・シャーマ (高山宏・榎正行訳) 『風景と記憶』 (河出書房新社 2005)。
- ¹⁷ レイキャヴィークの文化ハウスで開催された、アイスランドの中世写本に関する展覧会のために用意された次の本は、アイスランドにおける写本の成立から現代における中世写本の受容に至るまでの過程を、簡にして要を得たつくりで再現する。美しい写真や図版と第一級の研究者の解説という点で、他に類を見ない仕上がりとなっている。Gísli Sigurðsson & Vésteinn Ólason (ed.), *The Manuscripts of Iceland*. Reykjavík 2004.
- ¹⁸ アイスランドにおける修道制および修道院の研究は、驚くほど少ない。僅かなりともまとまった記述は、Jón Jóhannesson, *A History of the Old Icelandic Commonwealth*. Winnipeg 1974, p. 192-200; いくつかのアイスランド人のサガの成立を、ムンカスヴェラ修道院に蓄積された周囲の土地の政治的社会的記憶と結びつけることで読み解こうとする野心的な試みは、T. H. Andersson, Snorri Sturluson and the Saga school at Munkaþverá, in: A. Wolf (hrsg.), *Snorri Sturluson. Kolloquium anlässlich der 750. Widerkehr seines Todestages*. Tübingen 1993, S. 9-25.
- ¹⁹ このような観点からの文学社会学は、近年様々な場において実践されている。古いながらもそのような立場の嚆矢として理解されるのが、ロベール・エスカルピ (大塚幸男訳) 『文学の社会学』 (文庫クセジュ 1959)。
- ²⁰ 1つの写本をめぐる歴史学の可能性として、E. A. Rowe, *The Development of Flateyjarbók, Iceland and the Norwegian Dynastic Crisis of 1389*. Odense 2005.
- ²¹ J. Byock, *Viking Age Iceland*. Harmondsworth 2001 は、中世アイスランド (「ヴァイキング時代」というそのタイトルにもかかわらず、本書の対象とする時代は12世紀から13世紀が中心である) 社会を知る上で、最も手頃であり、また豊かな内容を持つ研究であるが、紛争解決を中心とした社会の維持調節機能に焦点があり、写本生産に関して論じられるところはない。なお、テキストとコンテキストの関係を論じた先駆的な業績として、P. Meulengracht Sørensen, *Saga and Society. An Introduction to Old Norse Literature*. Odense 1993.